

日本映画における英・仏・伊の文化認識の相違がもたらす字幕のずれ 文化的視点による字幕分類モデルの提示

小谷 康子

(立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科博士後期課程)

Culture is an important element for translation and it is no surprise that much research on culture and translation has been carried out so far. However, film translation has been an exception. Watching film is one of the most popular forms of entertainment all over the world. We can now easily watch many foreign films and are familiar with film subtitles. By contrast, the research on subtitling is still new in the field of translation and we know very little about the nature of interlingual subtitling. The purpose of this paper is to analyze the cultural gaps observed between the Japanese film "Rhapsody in August" and its English, French, and Italian subtitles. On the basis of this analysis, a new research model based on a cultural approach will be presented in order to further extend the research horizon in this new field.

1. はじめに

映画は世界中の人々の日常生活に浸透した娯楽であり、現在ではビデオや DVD などの普及によって、言語や文化の異なった人々が世界各国の映画を見ることができる。その際、外国映画と観客との言語や文化間の相違を調整する手段として字幕がある。現在のように外国映画が多く見られるようになればなるほど、同時に字幕に触れる機会は多くなっていく。

それにもかかわらず、字幕翻訳は、近年になってようやく学問的研究が始められた新しい分野であり、研究方法を模索している状態である (Taylor, 2000; Gambier & Gottlieb, 2001)。欧米でも重要な存在として注目は浴びており、研究対象として取り上げられつつあるが、字幕翻訳に関する専門的な文献も数えるほどしか存在しないのが現状である。また、言語と文化認識は、決して切り離すことができない密接な関係に

ある (Taylor, 1998) ゆえ、翻訳にとって文化認識はきわめて重要な要素である。翻訳と文化の関係は多くの研究者が検証を試みており、一般的な書記言語の翻訳と文化に関する文献は多く存在する。だが、字幕翻訳に関する文化的な検証はほとんどなされていない¹⁾。字幕翻訳は、字数制限、時間制限、スペース制限、情報量の減少などの制約がある (Gottlieb, 1992; Hatim & Mason, 2000) が、その厳しい制約の中、起点言語の内容を保ちながら、対象言語の文化にわかりやすいような翻訳をしなければならぬため、起点言語と対象言語の両方の文化理解は必要不可欠である。よって、字幕翻訳における文化的検証は非常に重要であると考ええる。

本研究は、黒澤明脚本・監督作品である「八月の狂詩曲」(1991)を取り上げ、日本語セリフの英語・フランス語・イタリア語への翻訳が文化認識の相違によりずれが生じることを明らかにしながら、字幕翻訳において文化的検証を可能にするための新しい字幕分類モデルを提示することを目的として検証を行う。

シャフナー & ハーティング (Schäffner & Herting, 1992) は同一言語から多様な言語への翻訳を比較することの意義を示しており、本研究のようにひとつの作品における各国の翻訳を比較することは、各国の翻訳に表れる文化認識の相違を見出すための適当な手段であると考ええる。また、同じテキストの翻訳を比較することで、各国の翻訳のストラテジーを明らかにすることができる (Venuti, 1998)。

検証するに当たっては、どのような映画を研究対象として使用するかを重要なポイントとして考慮した。研究対象を「八月の狂詩曲」と決定した理由としては、英・仏・伊の3ヶ国語の字幕が存在すること、日本独特の表現・ことわざ・方言などがセリフに含まれており、日常的な日本文化が現れていることがあげられる。また、本研究において1本の映画だけに絞った理由として、日本映画で英・仏・伊の3ヶ国語に字幕翻訳されているものは非常に限られており、その中から一般的な日本の文化的要素の含まれているものを見つけ出すことがきわめて困難であったことを付け加えておく。

1.1 先行研究

先行研究として、ゴットリーブの字幕翻訳ストラテジー (Gottlieb, 1992) と、ヴェヌティの翻訳理論 (Venuti, 1995) を取り上げた。

現在、字幕翻訳分野における理論として、デンマークの映像字幕翻訳の研究者であるゴットリーブが提示した10種類の字幕翻訳ストラテジー (表1参照) があり、これに基づいて起点言語のセリフと字幕翻訳の相違を分析することができる。字幕翻訳を分析する際の重要な理論であるゆえ、本研究では、このゴットリーブの字幕翻訳ストラテジーモデルを土台として研究を進めていく。

また、一般的な書記言語の翻訳と文化に関する先行研究の中で、文化的背景の相違により翻訳法が異なることを述べたヴェヌティの研究は、字幕翻訳と文化の関係を追求する際の基本的視点を導くことができるため、本研究に取り入れた。

1.1.1 ゴットリーブの字幕翻訳ストラテジー・モデル

ゴットリーブは、字幕翻訳に使用されるストラテジーを以下の 10 種類に分類した (表 1)。

表 1 ゴットリーブの字幕翻訳ストラテジーモデル

字幕翻訳 ストラテジー	英語表記	使用方法
拡張	Expansion	対象言語の文化圏の人々に理解しやすいよう、説明を追加する。起点言語の文化的ニュアンスが伝わらないときなどに使用する。
言い換え	Paraphrase	対象言語において起点言語と同じ表現ができないとき、起点言語のセリフの内容を歪めない範囲で言い換える。
転移	Transfer	直訳。起点言語に忠実に翻訳する。
模倣	Imitation	固有名詞、あいさつ、場所など、起点言語と同一の表現形態をそのまま使用する。
複写	Transcription	起点言語の文化においてでさえ、普通の表現ではないもの、例えば、特殊なスピーチ、第三国の言語などの独特な言い回しをそのままコピーする。
変換	Dislocation	音楽的なもの (映像から聞こえる歌、しゃれ、語呂合わせなど)、視覚的なもの (映像に映し出されるもの) が対象となり、その内容よりも音楽的・視覚的効果を優先して対象言語の文化向けに調整し、別の表現に置き換えること。
圧縮	Condensation	セリフの内容をできるだけ歪めずに凝縮し、簡潔にする。
簡素化	Decimation	上記「圧縮」の極端な形であり、情報内容を減らし、要約した表現。重要な要素であっても削除される可能性がある。
削除	Deletion	セリフの全体的な削除。重要でないとは判断されたセリフを消去する。
放棄	Resignation	対象言語の文化圏に存在しないような起点言語の文化特有の事柄 (ことわざ、慣用表現など) を、対象言語の文化向けにまったく別の表現で言い換える。

ゴットリーブは、字幕翻訳の際に上記のどのストラテジーを使用し、起点言語のセリフがどのように変形されたかを検証し、起点言語と字幕翻訳の情報量の差異を比較した。

1.1.2 ヴェヌティの翻訳理論

ヴェヌティは、主として外国文学作品の英訳を研究対象とし、文化的背景が異なることにより、その翻訳法が大きく次の2つに分けられると主張した(イタリックは筆者)。

- 1) *a domesticating method*, an ethnocentric reduction of the foreign text to target-language cultural values, bringing the author back home. (Venuti, 1995: 20)
- 2) *a foreignizing method*, an ethnodeviant pressure on those values to register the linguistic and cultural difference of the foreign text, sending the reader abroad. (Venuti, 1995: 20)

これら2つの翻訳法は、1)を自国化翻訳法(*domesticating method*)、2)を外国化翻訳法(*foreignizing method*)とし、次のように説明できる。

自国化翻訳法は、対象言語の文化の価値観に重点をおき、読者が理解しやすいよう、対象言語の文化の基準に当てはめて行う翻訳である。一方、外国化翻訳法は、自国化翻訳法と反対の立場を取る。外国語の文書を対象言語の文化の基準や価値観に当てはめずに、読者に文化的・言語的相違を認識させるため、起点言語の文化の異質性を維持しようと試みる原文忠実主義の翻訳である。

1.2 検証方法

本研究は、以下の方法で検証を行う。はじめに、研究対象とした日本映画「八月の狂詩曲」の英・仏・伊の3ヶ国語の字幕翻訳をゴットリーブの字幕翻訳ストラテジーモデルを用いて分析する。本研究では、特に文化認識によって3ヶ国語の翻訳が異なるところを抜き出し、起点言語である日本語のセリフが、英・仏・伊の3ヶ国語の字幕において、どのようなストラテジーが用いられ、どのような翻訳になったのかを検証する。

次に、文化に焦点を当てた分析を試みる。ゴットリーブのストラテジーにおいて同じカテゴリーに分類された字幕翻訳を検証する。その際に生じる問題点を指摘し、文化的視点から字幕翻訳を分類するために補わなくてはならない新しい要素を提示する。また、ゴットリーブのストラテジーに追加すべき新しい要素を指摘し、ゴットリーブ・モデルとヴェヌティの翻訳理論を基本とした文化的視点を融合させ、さらに検証の結

果生じた問題の解決策として新しい要素を加えた「文化的視点による字幕分類モデル」を提示する。

2. 実例分析

2.1 ゴットリーブの字幕翻訳ストラテジーによる分析

研究対象である日本映画「八月の狂詩曲」の英語・仏語・伊語の字幕翻訳をゴットリーブのストラテジーを使用し、起点言語がどのような手法でどのように変形されたか、起点言語のセリフと字幕翻訳の差異を検証する。特に文化認識の相違によって3ヶ国語の字幕翻訳が異なるところを抜き出し、検証を試みた。その一部を例として以下に示す。

セリフの区切り方については以下のように決定する。ゴットリーブ (personal communication, August 12, 2003) によると、セリフの区切りは“the words spoken between two breathing intervals” 定義されている。つまり、登場人物が2呼吸する間に話した内容がひと区切りとなり、それが1回の字幕として映像に現れるということである。これは、物語の流れを保ち、人々がきちんと字幕を読む事ができる時間を十分に与えるためであるとしている。

しかし、今回の分析では、起点言語が日本語であり、比較する字幕が英語・仏語・伊語ということで、起点言語とは文法的にも語順についても大きく異なるため、日本語で登場人物が話している内容とそのときに映像に現れる字幕の内容が必ずしも一致するとは言えない。そこで、起点言語の各場面の中での2呼吸分のセリフを土台としながら、英語、仏語、伊語において共通して物語の流れが切れる箇所を照合し、4ヶ国語で物語の内容の切れる箇所が一致するところで区切り、それをひと区切りとし、例として抜き出すことにした。

ここでは、起点言語と字幕翻訳を比較し、翻訳の際、各言語においてどのようなストラテジーを使用し、また、使用されたストラテジーがどのように異なるかを探ることを目的としている。単語や節レベルで細かく区切って分析するのではなく、全体の意味の中で、起点言語と翻訳の最も大きな相違点に焦点を当てて検証する。よって、単語や節レベルにおいても多様なストラテジーが使用されている可能性は考えられるものの、ここで翻訳の際に使用したストラテジーとして提示するのは、起点言語のセリフの全体的な意味と翻訳との最も大きな相違点に関してのストラテジーということになる。

なお、起点言語のセリフの下に英・仏・伊の順にその字幕翻訳を記載するとともに、3ヶ国語に字幕翻訳されたセリフの右側にそれぞれの日本語訳を記載する。また、使用したストラテジーを各言語を表示した右隣のカギ括弧内に提示する。

例 1

起点言語

「すだれのかかった石頭！」

英語・・・「転移」

A stone head with a reed screen.

すだれのかかった石頭。

仏語・・・「言い換え」

Une tête de mule déplumée!

毛の抜けたラバ頭！

伊語・・・「放棄」

È dura come una tartaruga Ninja.

忍者ガメのように強情だ。

仏語の場合、「ラバの頭」ということで「石頭」を意図し、それに「毛の抜けた」というのをプラスして、おばあさんの頭がすだれのようにになっていることを意味していると考えられる。伊語の場合は、日本独特の「すだれ」というものが翻訳されておらず、この映画の内容とはまったく関係ない「忍者」という言葉を用い、「すだれ」の代わりに日本文化の要素を出そうとしていると考えられる。カメの甲羅のように硬いということ、石頭を表現していると推測できるが、それに「忍者」を付け足しているのは、どういった理由からか不明である。アメリカの人気アニメ「忍者タートル」から取っているのかもしれないが、日本と言えは「忍者」というようなステレオタイプの文化認識により訳出されたものとも考えられる。

例 2

起点言語

「そう言えば、お前は鈴吉にそっくりたい、瓜二つばい。」

英語・・・「言い換え」

...you certainly look like Suzukichi.

お前は鈴吉にそっくりだね。

Like two peas in a pod.

さやの中の二つの豆のようだよ。

仏語・・・「言い換え」

Mais, au fait...

そう言えば、

toi et Suzukichi,

お前と鈴吉は

vous êtes copie conforme,

そっくりだ

comme deux gouttes d'eau!

二滴の水のしずくのようだよ。

伊語・・・「言い換え」

Vieni un pò qui tu.

お前、ちょっとここに来てごらん。

Sai che ti dico?

何が言いたいかわかるかい？

Assomigli tantissimo a Suzuchki.

鈴吉にものすごく似ているよ。

Due gocce d'acqua.

二滴の水のしずくだね。

この例で注目したいのは、起点言語の「瓜二つ」という言い回しが文化の違いによって表現の仕方が変化することである。起点言語では「瓜を二つに割った形がそっくりなところ」からよく似ていることを「瓜」を使って表現しているのに対し、英語では「豆」、仏語と伊語では「水滴」でそれぞれ表現している。

例3

起点言語	
「お祖父ちゃんの勤めていた学校、爆心地の近くなの。」	
英語・・・「簡素化」	
He taught at a school in the city.	彼は街の学校で教えていたのよ。
仏語・・・「圧縮」	
Son école était proche du lieu de l'explosion	彼の学校は爆心地の近くだった のよ。
伊語・・・「転移」	
La scuola dove insegnava il nonno era vicina all'epicentro.	お祖父ちゃんが教えていた学校は 爆心地の近くだったのよ。

英語の例であるが、ここの場面では「お祖父ちゃんが爆心地の近くにいた」ということが重要なポイントとなるにもかかわらず、最も重要な「爆心地の近く」という情報を落とし、単純に「街の学校」としている。これは、映画の舞台である長崎に原爆を落としたアメリカが、原爆という悪のイメージを与えるのを最小限にとどめ、意識的に「爆心地」という言葉の使用を避けたのではないかと推測できる。

例4

起点言語	
「タイノ、タキノボリ」	
「クラークさん、違うよ、鯛じゃない。鯉だよ、鯉の滝登り。」	
英語・・・「転移」	
“A sea bream ascending the waterfall.”	「鯛の滝登り。」
That's not right.	「違うよ。」
It's a carp.	「鯉だよ。」
“A carp ascending the waterfall.”	「鯉の滝登り。」
仏語・・・「転移」	
“La daurade remonte la cascade.”	「鯛の滝登り。」
Non, Clark!	「違うよ、クラークさん！」

Pas la daurade! La carpe! “La carpe remonte le courant.” 伊語・・・「放棄」	「鯛じゃないよ！鯉だよ！」 「鯉の滝登り。」
Cascata! Non berrò mai tua acqua! No, sbagliato, il proverbio non dice così. Fontana, non berrò mai la tua acqua.	「滝よ！お前の水なんか絶対飲まないぞ！」 「間違いだよ。」 「ことわざはそうじゃないよ。」 「泉よ！お前の水なんか絶対に飲まないぞ！」

ここでは、英語・仏語ともに起点言語の文化を尊重し、直訳しているのに対し、伊語の場合は、起点言語のことわざの意味とはまったく異なることわざに完全に言い換えている。

2.2 文化的要素の追加による問題点

次に、文化的要素を加えた分析を試みた。ゴットリーブのストラテジーにおいて同じカテゴリーに分類されたものを比較した。すると、同じカテゴリー内に2つの異なった文化的視点が存在することが見出された。それらは、「起点言語を無視するわけではなく、起点言語の文化を配慮しながら対象言語の文化向けに言い換えたもの」と「起点言語を無視し、対象言語の文化圏からみた独自の解釈によって作り変えたもの」の2つの視点である。以下、「拡張」のストラテジーにおいて見出された例を示す。

例 1

起点言語	
「この鈴吉っていうとは、一番下の弟やったけど、少し頭の弱か子でな...」	
仏語・・・「拡張」	
Ce Suzukichi (Carillon-du-bonheur), le plus jeune de mes frères, il était un peu crétin.	この鈴吉（幸福の鈴）は 兄弟の中で一番下で 少しまぬけだったんだ。

ここでは、「鈴吉」という名前の漢字の意味が、対象言語の文化の人々にわかるように説明を加えている。この翻訳は、漢字の意味を直訳したもので、「鈴吉」の「吉」を「幸福」とし、「幸福の鈴」となっている。起点言語の漢字の意味をより正確に伝えようと起点言語の文化に理解を示した翻訳をしている。

例 2

起点言語

「河童やけん」

「河童?!」

仏語・・・「拡張」

C'était un kappa!

河童だったんだよ!

Un kappa?

河童?

C'est comme ça qu'on appelle

こちら辺では水の精のことを

les génies des eaux par ici...

こう呼ぶんだよ。

この例は、お祖母さんが孫たちに河童を見たときのことを話している場面である。「河童」という日本独特の伝説の生き物を対象言語の文化圏の人々にわかるように説明を加えている。しかし、「河童」という名称は、特にお祖母さんの住んでいる長崎の地域に限った名称ではなく、日本で一般的に使われている名称であるので、「こちら辺では水の精のことをそう呼ぶんだよ」という説明は対象言語の文化圏からみた独自の解釈によって作られたものであると考えられる。

上記の例において、「拡張」のストラテジーには「起点言語を無視するわけではなく、起点言語の文化を配慮しながら対象言語の文化向けに言い換えられた翻訳」と「起点言語を無視し、対象言語の文化圏からみた独自の解釈によって作り変えた翻訳」の 2 種類あることが明らかになった。

文化に焦点を当てて検討してみると、これら 2 種類の異なった文化的視点をもつ字幕翻訳を、同じカテゴリーに属させることには無理がある。しかし、上記の「拡張」の例において、ゴットリーブのストラテジーでは、これらの異なった 2 つの文化的視点を同じカテゴリーに分類せざるを得ない。ゴットリーブのストラテジーモデルには文化的要素が組み込まれていないため、字幕翻訳の文化的分析は不十分となる。この問題を解決するために、ゴットリーブのストラテジーモデルに文化的な視点を加えた新たな字幕分類モデルを提示する必要があると考えた。

3. 文化的視点追加による新字幕分類モデルの作成

前章で明らかになった結果に基づき、ゴットリーブのストラテジーモデルを文化的視点から検討し、問題点解決のための新しい分類モデルを作成する。

3.1 ゴットリーブの字幕翻訳ストラテジーの文化的分類

最初に、ゴットリーブによる 10 種類のストラテジーを、文化的視点からの枠組みを用い、分類を試みる。ヴェヌティの翻訳理論において、翻訳法が外国化と自国化に分けられることを土台とし、ここでは、外国化翻訳法を「起点言語の文化重視」、自国化翻訳法を「対象言語の文化重視」と表示し、10 種類のストラテジーを以下のように 2 種類のカテゴリーに分類する。

- 起点言語の文化重視：転移、模倣、複写
- 対象言語の文化重視：拡張、言い換え、変換、圧縮、簡素化、削除、放棄

このように分類した理由は次のようになる。「転移」は直訳であること、また「模倣」「複写」はともに起点言語に出てきたものをそのまま模倣、複写するということで、「起点言語の文化重視」に振り分けた。一方、「拡張」は対象言語の文化の人々によりわかりやすいように説明を加えること、「言い換え」は対象言語の文化向けに別の表現で言い換えること、「変換」は音で聞くもの（しゃべり、語呂合わせ、歌など）および映像で見るものを、その内容よりも音楽的・視覚的効果の方を重要視し、対象言語の文化に向けて調整した別の表現に置き換えること、「圧縮」は起点言語の情報の内容を簡潔にまとめること、「簡素化」は情報の内容をさらに短くまとめ、重要なものでさえ消してしまう可能性があること、「削除」は不必要なものとして排除されること、さらに「放棄」は対象言語の文化には存在しない起点言語の文化特有の表現を、対象言語の文化向けにまったく別の表現で言い換えるということで、いずれも「対象言語の文化重視」に振り分けた。

上記の分類において「対象言語の文化重視」のグループに振り分けた「拡張」のストラテジーについては、2.2 において検証したように「起点言語を無視するわけではなく、起点言語の文化を配慮しながら対象言語の文化向けにわかりやすく言い換えた翻訳」と「起点言語を無視し、対象言語の文化圏からみた独自の解釈の上で作り変えた翻訳」の2種類があった。ゴットリーブのストラテジーモデルにおいては、文化的要素が組み込まれていないため、これら2種類は同じカテゴリーに分類せざるを得なかった。その問題を解決するために、「対象言語の文化重視」に振り分けた「拡張」を「起点言語を無視せずに、起点言語の文化を配慮した翻訳操作」と「起点言語を無視した対象言語の文化圏からみた独自の解釈による翻訳操作」に分類する。以下、前者を「起点言語配慮型」、後者を「独自解釈型」と表示する。このように、対象言語の文化重視のカテゴリーには2種類の異なった文化的視点が存在するため、残りの「言い換え」「圧縮」「変換」「簡素化」「削除」「放棄」についても同様に分類を試みる。

対象言語の文化重視

- 起点言語配慮型：拡張、言い換え、圧縮
- 独自解釈型：拡張、変換、簡素化、削除、放棄拡張、言い換え、圧縮

上記の分類から、「拡張」のカテゴリーは、2.2 の例において明らかになったように「起点言語配慮型」と「独自解釈型」の両方に可能性のあることがわかる。このストラテジーについては、分析の際、字幕翻訳を詳細に検討し、どちらに属するかを字幕ごとに判断しなくてはならない。

その他のストラテジーの分類理由は次のようになる。「言い換え」は起点言語のセリフを内容を歪めない範囲で対象言語の文化圏で使用されている表現に言い換えること、「圧縮」は起点言語情報の内容をできるだけ歪めずに簡潔にまとめるということで、いずれも「起点言語配慮型」のカテゴリーへ振り分けた。一方、「変換」は音で聞くもの(しゃれ、語呂合わせ、歌など)映像で見るものを、その内容よりも音楽的・視覚的效果を優先して対象言語の文化向けに調整するため、起点言語の内容から離れた別の表現に置き換えられてしまうこと、「簡素化」は起点言語のセリフを極端に短くまとめ、重要な部分さえも削除してしまう可能性があること、「削除」は起点言語の文化に表れたものを不要なものとして排除するということ、「放棄」は起点言語の文化特有の表現を、対象言語の文化向けにまったく別の表現で言い換えるということで、「独自解釈型」のカテゴリーに分類した。

ここで、2.1、2.2 からの例をいくつかあげて、以上の文化的要素を加えた分類を当てはめてみる。なお、文化的視点からの分類は、使用したストラテジーの右隣の2重カギ括弧内に記載する。

例 1

起点言語	
「すだれのかかった石頭！」	
英語・・・	「転移」『起点言語の文化重視』
A stone head with a reed screen.	すだれのかかった石頭。
仏語・・・	「言い換え」『対象言語の文化重視・起点言語配慮型』
Une tête de mule déplumée!	毛の抜けたラバ頭！
伊語・・・	「放棄」『対象言語の文化重視・独自解釈型』
È dura come una tartaruga Ninja.	毛者ガメのように強情だ。

例 2

起点言語	
「そう言えば、お前は鈴吉にそっくりたい、瓜二つばい。」	
英語・・・	「言い換え」『対象言語の文化重視・起点言語配慮型』
...you certainly look like Suzukichi.	お前は鈴吉にそっくりだね。
Like two peas in a pod.	さやの中の二つの豆のようだよ。
仏語・・・	「言い換え」『対象言語の文化重視・起点言語配慮型』
Mais, au fait...	そう言えば、
toi et Suzukichi,	お前と鈴吉は
vous êtes copie conforme,	そっくりだ
comme deux gouttes d'eau!	二滴の水のしずくのようだよ。

伊語・・・「言い換え」『対象言語の文化重視・起点言語配慮型』
Vieni un pò qui tu. お前、ちょっとここに来てごらん。
Sai che ti dico? 何が言いたいかわかるかい？
Assomigli tantissimo a Suzuchki. 鈴吉にものすごく似ているよ。
Due gocce d'acqua. 二滴の水のしずくだね。

例3

起点言語

「お祖父ちゃんの勤めていた学校、爆心地の近くなの」

英語・・・「簡素化」『対象言語の文化重視・独自解釈型』

He taught at a school in the city. 彼は街の学校で教えていたのよ。

仏語・・・「圧縮」『対象言語の文化重視・起点言語配慮型』

Son école était proche 彼の学校は爆心地の近くだった
du lieu de l'explosion のよ。

伊語・・・「転移」『起点言語の文化重視』

La scuola dove insegnava il nonno お祖父ちゃんが教えていた学校は
era vicina all'epicentro. 爆心地の近くだったのよ。

例4

起点言語

「タイノ、タキノボリ」

「クラークさん、違うよ、鯛じゃない。鯉だよ、鯉の滝登り。」

英語・・・「転移」『起点言語の文化重視』

“A sea bream 「鯛の滝登り。」
ascending the waterfall.”

That's not right. 「違うよ。」

It's a carp. 「鯉だよ。」

“A carp ascending the waterfall.” 「鯉の滝登り。」

仏語・・・「転移」『起点言語の文化重視』

“La daurade remonte la cascade.” 「鯛の滝登り。」

Non, Clark! 「違うよ、クラークさん！」

Pas la daurade! La carpe! 「鯛じゃないよ！鯉だよ！」

“La carpe remonte le courant.” 「鯉の滝登り。」

伊語・・・「放棄」『対象言語の文化重視・独自解釈型』

Cascata! Non berrò mai tua acqua! 「滝よ！お前の水なんか絶対飲ま
No, sbagliato, ないぞ！」 「間違いだよ。」

il proverbio non dice così.	「ことわざはそうじゃないよ。」
Fontana, non berrò	「泉よ！お前の水なんか絶対に
mai la tua acqua.	飲まないぞ！」

例5

起点言語

「この鈴吉っていうとは、一番下の弟やったけど、少し頭の弱か子でな…」

仏語・・・「拡張」『対象言語の文化重視・起点言語配慮型』

Ce Suzukichi (Carillon-du-bonheur),	この鈴吉（幸福の鈴）は
le plus jeune de mes frères,	兄弟の中で一番下で
il était un peu crétin.	少しまぬけだったんだ。

例6

起点言語

「河童やけん」

「河童？！」

仏語・・・「拡張」『対象言語の文化重視・独自解釈型』

C'était un kappa!	河童だったんだよ！
Un kappa?	河童？
C'est comme ça qu'on appelle	こちら辺では水の精のことを
les génies des eaux par ici...	こう呼ぶんだよ。

このように、翻訳する際に使用される各ストラテジーには文化が結びついており、たとえ翻訳をする上で同じストラテジーを用いて操作していても、どのような文化的視点を持って翻訳されたのかによって細分化される。

3.2 伊語における問題点と解決策

ここで、伊語の翻訳における問題点に注目する。例をあげてその問題点を指摘し、その解決策を探る。

例1

起点言語

「男 鉄太郎 銅三郎 銃四郎 鐘五郎 釘之助 鉦吉 鋤太 鈴吉
女 鍋 鉦 鏡子」

伊語

Tezutaro...	テツタロウ
-------------	-------

...Dosapuro, Jushjiro,
Shoguro, Kughinoské.
Natakichi, Kwatà, Suzuchki.
Naké, Kané, Kyoko.

ドウサプロウ、ジュシュジロウ
ショウグロウ、クギノスケ
ナタキチ、クワタ、スズチキ
ナケ、カネ、キョウコ

上の例は、お祖母さんの兄弟の名前を羅列する場面であるが、兄弟の名前のいくつかは、明らかに誤訳であることがわかる。ほとんどの日本人が「どうさぶろう」という名前が「どうざぶろう」の間違いだと言及するであろう。日本では、名前に「ぶ」が入るものは一般的ではない。これらの名前の誤訳は、起点言語の文化に関する理解欠如が原因であると考えられる。

さらに、次の例 2 のように、映画の内容を把握してないことが原因で、登場人物の名前を誤訳し、物語に混乱を招くような事態も引き起こしている。

例2

起点言語

「私からも頼みます。お祖母ちゃん、四人の孫と一緒にハワイへいらっしやい。そして、錫二郎さんに会ってあげてください。とり急ぎ 忠雄」

伊語

Io sono d'accordo con lo zio.

私はおじさんに同意します。

Prendi i tuoi quattro nipotini..

4 人の孫をお祖母ちゃんと一緒に

..e portali con te alle Hawaii.

ハワイに連れていらっしやい。

Darai una gioia a Suzushiro..

スズシロウさんやわれわれのいとこ皆に

..e a tutti i nostri cugini.

喜びを与えることになるでしょう。

Tuo figlio, Tateo.

あなたの息子、縦男。

お祖母さんの息子である「忠雄」と、忠雄の息子である「縦男」の名前を両方ともに「縦男」にしてしまっている。父親「忠雄」からの手紙の最後の名前が「縦男」となっており、この手紙を忠雄の息子の「縦男」が読むため、物語に混乱を招く。映画の内容を十分に理解していないため、このような名前の誤りを引き起こしていると考えられる。なお、この部分の伊語訳に起点言語との相違がみられるが、ここでは名前の間違いに注目しているため、伊語訳についての指摘はしない。

以上のような、起点言語に関する理解の欠如が原因で起こった完全な誤訳を分類しようとする際、ゴットリーブの 10 種類のストラテジー内には当てはまるカテゴリーが存在しないため、ゴットリーブのストラテジーによる分類は不可能となる。したがって、このような誤訳を分類するための新しいカテゴリーを加える必要がある。そこで、「錯誤」というカテゴリーを加える。これは、他の 10 種類のストラテジーモデルのように

字幕翻訳する際に用いられる翻訳手法というのではなく、翻訳した結果、このようなカテゴリーへの分類が必要となり、新しく付け加えたものである。他のゴットリーブのストラテジーに加える形を取り、「使用したストラテジー」ということで記載する。また、この「錯誤」の文化的分類であるが、起点言語を無視した対象言語の文化圏からみた独自の解釈での翻訳と判断し、「対象言語の文化重視・独自解釈型」のカテゴリーに入れる。

以上の検証結果により、文化に焦点を当て、「錯誤」のカテゴリーを新しく加えた字幕翻訳のストラテジーは表 2 のように分類される。

表2 文化に焦点を当てた字幕翻訳のストラテジー分類

起点言語の文化重視	対象言語の文化重視	
	起点言語配慮型	独自解釈型
転移	拡張	拡張
		変換
模倣	言い換え	簡素化
		削除
複写	圧縮	放棄
		錯誤

4. 文化的視点による字幕分類モデルの提示

これまでの検証の結果をもとに、文化的視点による字幕分類モデルを提示する。この新しいモデルは、ゴットリーブのストラテジーモデルにヴェヌティの翻訳論を基本的視点とした文化的要素を導入し、さらに、日本映画「八月の狂詩曲」の3ヶ国語の字幕翻訳を文化的視点から検証した際に発生した、ゴットリーブのストラテジーモデルに関する問題点を解決するために、新たな要素を加えた上で完成させた。

文化的視点としては、ヴェヌティの分類による2種類の翻訳理論、すなわち、外国化翻訳法および自国化翻訳法を基本的視点とし、外国化翻訳を「起点言語の文化重視」、自国化翻訳を「対象言語の文化重視」とした。後者の対象言語の文化重視については、検証の結果、「起点言語を無視するわけではなく、起点言語の文化を配慮した翻訳」と「起点言語を無視した、対象言語の文化圏からみた独自の解釈による翻訳」の異なった文化的視点が存在したため、「対象言語の文化重視」をさらに「起点言語配慮型」と「独自解釈型」に分類することとした。この「起点言語配慮型」と「独自解釈型」の分類をヴェヌティの自国化翻訳法（本研究では「対象言語の文化重視」と表示）に加えることにより、各言語における字幕翻訳の際の傾向がより明確になり、文化的視点に焦点を当てて分析する場合には有効であると考えられる。

また、ゴットリーブによる 10 種類のストラテジーモデル（転移・模倣・複写・言い換え・拡張・変換・圧縮・簡素化・削除・放棄）で分析を試みたところ、主として伊語において、この 10 種類では分類できない字幕翻訳が存在した。その問題を解決するために前述のとおり「錯誤」というカテゴリーを追加し、字幕翻訳のストラテジーとしての項目を 11 種類とした。この「錯誤」という新しいカテゴリーには、起点言語に関する理解の欠如が原因で起こった完全な誤訳を振り分ける。

ゴットリーブのストラテジーモデルと文化的視点を融合した、新たな「文化的視点による字幕分類モデル」をまとめると次のようになる（表3）。

表 3 文化的視点による字幕分類モデル

字幕翻訳 ストラテジー	文化的視点		
	起点言語の 文化重視	対象言語の文化重視	
		起点言語配慮型	独自解釈型
転移		×	×
模倣		×	×
複写		×	×
言い換え	×		×
拡張	×		
変換	×	×	
圧縮	×		×
簡素化	×	×	
削除	×	×	
放棄	×	×	
錯誤	×	×	

これまでに表示した例から、字幕翻訳する際に使用されるさまざまな手法が、文化的認識と深く関わっていることが明らかになった。一本の映画においてでさえ、多くの字幕翻訳の差異が見られた。文化認識の相違が字幕翻訳に与える影響は大きい。字幕翻訳を分析する際、文化的分析を行うことはきわめて重要である。ゴットリーブの提示した字幕翻訳のストラテジーモデルは、起点言語と字幕翻訳との情報量の差異を検証するためには画期的なモデルであったが、字幕翻訳の文化的分析に対しては不十分であった。そこで、ゴットリーブのストラテジーモデルと文化的要素を融合した「文化的視点による字幕分類モデル」の作成が必要となった。この新しいモデルを完成させたことで、字幕翻訳においてどのようなストラテジーを用いると、どのような文化

的視点が背景にあるのかを追求することができる。字幕がどのような文化的視点を持って翻訳されているのかを明らかにすることにより、各国特有の文化的視点や、字幕翻訳への取り組み方、異文化理解に対する疑問点や問題点などを見出し、解決策を追究していくことが可能になる。

翻訳の文化的な検証はきわめて重要でありながら、字幕翻訳においては未だあまり試みられていない。今回提示した、ゴットリーブのストラテジーモデルとヴェヌティの翻訳論に依拠した、文化的要素を融合した新しい字幕翻訳モデルにより、これまでゴットリーブのストラテジーモデルにおける分析にとどまっていた字幕翻訳の研究に、翻訳にとってきわめて重要な文化という要素を加えた、さらに進んだ検証を試みる事が可能になる。対象となる映画の重要なテーマ、物語、ニュアンスなどを崩さずに、対象言語の文化の観客が違和感なしにとらえることができる字幕を目指すために、本研究において提示した新しい文化的視点による字幕翻訳モデルを今後の字幕翻訳研究の発展に活用したい。

著者紹介： 小谷康子 (Kotani, Yasuko) 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科
博士後期課程在学中。連絡先： yasuko@2001.jukuin.keio.ac.jp

【註】

1. 以下、本稿では「異言語間字幕翻訳」(interlingual subtitling) を指して「字幕翻訳」と呼ぶ。

【参考文献】

- Gambier, Y., and Gottlieb, H. (Eds.). (2001). *(Multi) media translation*. Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Gottlieb, H. (1992). Subtitling: A new university discipline. In C. Dollerup & A. Lindegaard (Eds.), *Teaching translation and interpreting: Training, talent and experience* (pp. 161-170). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Hatim, B., & Mason, I. (2000). Politeness in screen translating. In L. Venuti (Ed.), *The translation studies reader* (pp. 430-445). London and New York: Routledge.
- Schäffner, C., & Herting, B. (1992). The revolution of the magic lantern: A cross-cultural comparison of translation strategies. In M. Snell-Hornby, F. Pöchhacker & K. Kaindl (Eds.), *Translation studies: An interdisciplinary* (pp. 27-35). Amsterdam and Philadelphia: John Benjamins Publishing Company.
- Taylor, C. (1998). In defence of the word: Subtitles as conveyors of meaning and guardians

of culture. In R.M. Bollettieri Bosinelli, C. Heiss, M. Soffritti & S. Bernardini (Eds.), *La traduzione multimediale: Quale traduzione per quale testo?* (pp. 153-166). Bologna, Italy: CLUEB.

Taylor, C. (2000). The subtitling of film: reaching another community. In E. Ventola (Ed.), *Discourse and community: Doing functional linguistics* (pp. 309-327). Tübingen, Germany: Gunter Narr Verlag.

Venuti, L. (1995). *The translator's invisibility: A history of translation*. London and New York: Routledge.

Venuti, L. (1998). Strategies of translation. In M. Baker (Ed.), *Routledge encyclopedia of translation studies* (pp. 240-244). London and New York: Routledge.

【研究に使用した題材】

Kurosawa, H. (Producer), & Kurosawa, A. (Director). (2000). *Rhapsody in august* [Motion picture]. Santa Monica, CA: MGM Home Entertainment Inc.

Kurosawa, H. (Producer), & Kurosawa, A. (Director). (2002). *Rhapsodie en août* [Motion picture]. Paris: Pathé Video.

Kurosawa, H. (Producer), & Kurosawa, A. (Director). (2002). *Rapsodia in agosto* [Motion picture]. Milan: Medusa Video SRL.

黒澤久雄（制作者）& 黒澤明（監督）(2002) 『八月の狂詩曲』[映画] 松竹